

《書評》

小長谷有紀、川口幸大、長沼さやか編『中国における社会主義的近代化 宗教・消費・エスニシティ』

勉誠出版、2010年12月、304頁

中村 知子*

Book Review: *Socialist modernization in China -Religion Consumption Ethnicity*,
Tokyo: Benseisha, 2010

NAKAMURA Tomoko

目次

1. はじめに
2. 本書の内容紹介
3. 本書の学術的意義

1. はじめに

現在でも中国は「社会主義」イデオロギーを掲げた国家である。しかし良く知られているように、経済発展においては市場主義を取り入れており、かつて目指していたはずの「社会主義的社会的実現」とは異なるものとなっている。

本書は、「社会主義」イデオロギーに焦点をあてた、いわゆる思想史上に位置づけられる分析本ではない。むしろその対極に位置づけられる本である。本書の立場は「社会主義」イデオロギーを掲げる政治的枠組みの下で、「人びとが政策を一義的に押し付けられ、一方的に受容しているのではなく、選択的に受容したり、能動的に読み変えたりしている」とのいう点に置かれ、様々な地域の事例を挙げながら実態を明らかにする方向でまとめられている。すなわち、中国が掲げる社会主義イデオロギーの実践に焦点を当てた論文集と言える。

中国をフィールドとした調査を齎ったことがある筆者にとって、本著が主張する「人々が政策を一方的に受容していない」実態は、説得力のあるものである。現状を鑑みても、中国の社会は

*神奈川大学兼任講師

多様性に満ちている。民族的多様性、経済的格差、文化的差異に加え、多様な地理的環境など様々な差異が重なる中国において、一つの社会的イデオロギーを一方的に受容させることは不可能に近い。筆者もかつて、国家政策が地方で実践される際の地方政府および住民の政策受容と実践をテーマとして取りあげたことがあるが、国家政策は方向性を定める機能を持つ一方で、政策実践には各地方の特性を生かした柔軟な対応や解釈が必要不可欠であった。

本書は2節でみるように、対象としている地域が広域にわたっており、各々の地域における柔軟な社会主義的近代化を見ることが出来よう。さらに執筆者は、中国をフィールドとする新進気鋭かつ将来の研究業界を牽引していくと思われる、有望な若手研究者が中心となっている。執筆者の専門は、主に文化人類学であるものの、政治社会学や現代文学まで含まれており、本書の内容は多岐にわたるといえよう。

次に、本書の内容紹介及び簡単な評を行う。

2. 本書の内容紹介

本書は以下の構成から成る。

序 小長谷有紀

第I部 宗教と信仰をめぐるポリティクス

廟と儀礼の復興、およびその周縁化——現代中国における宗教のひとつの位相 川口幸大
上海におけるプロテスタントの宗教空間——宗教政策と日常の実践のはざままで 村上志保
中国共産党のイスラーム政策の過去と現在——寧夏回族自治区銀川市の事例 澤井充生
現代中国における墓碑の普及と「孝子」たち——陝西省中部農村の事例から 田村和彦

第II部 社会主義を消費する、社会主義が消費する

商品化される社会主義——赤いポスターを事例に 高山陽子
都市景観の再生計画と住民の選択的参与——広州市の下町の事例から 河合洋尚
オランムチル現象にみる内モンゴル・インパクト シンジルト

第III部 エスニシティ・アイデンティティの語り方／語られ方

ウイグル族と「漢化」——文化の二分法を超えて 小島祐輔
欺瞞と外部性——チベット現代作家トオウンドゥプジャの精読から 大川謙作
現代中国における宗族新興の可能性——広東珠江デルタの水上居民を例に 長沼さやか

あとがき

第I部1本目の川口論文「廟と儀礼の復興、およびその周縁化——現代中国における宗教のひとつの位相」は、現代中国における宗教の諸相を描くためには、先行研究が取りあげてきたイスラームやキリスト教等「目につきやすい」公認宗教だけでなく「目につきにくい」宗教にも注目することが重要との立場に立ち、論を展開する。著者は中国の現状では宗教とみなされていない廟の儀礼が、政府の関与と黙認のはざままで周縁性を保つことでその持続性を保つ様相を見事に記している。例えばある儀礼には、道士が儀礼を施行して人々が参拝するという、いわゆる「儀礼的」な要素が含まれていた。しかしながら別の儀礼では、地元の富裕者が参加したことにより近隣の地方幹部までが参加するオフィシャルな宴へと変化し、グリーゾーンとなるような儀礼的な側面は排除されていたという。著者は後者の儀礼が政府も関与する公的なイベントの性格をもったことを「政策の射程に入った」と表現し、公認宗教との構造的類似性をも指摘している。

本論で興味深い点は、(本論を読む限りではあるが) 儀礼従事者及び参加者の基層に、儀礼的グリーゾーンに対する共通認識が備わっている点である。すなわち、儀礼に関わる人々が、誰かの指示を受けずとも、その儀礼の状況に応じ何をしてはいけないのか、何であれば許されるのかを認知し、柔軟に適応している。このような基層にある共通の認知が「目につきにくい」宗教の周縁性とその存続の核となっているのではないだろうか。

第I部2本目村上論文は、中国の公認宗教であるキリスト教を取りあげている。キリスト教は中国の公認宗教であるが、その活動の場は政府に公認されている教会と、非公認の教会や集会場の2種類があるという。著者は公認教会から集会場まで、様々な宗教空間において聞き取りを実施し、社会主義的近代化に伴い宗教空間に次のような変化が生じていることを指摘している。

宗教空間はもともと政府の管理下で特定の形態が維持されてきたが、経済発展に伴いその枠組みを逸脱する空間が増加してきた。まず近年のキリスト教徒増加に伴い、特に非公認の場が増加した。ちなみに非公認の場と公認の場を利用する人々は明確に区分されている訳ではなく、人々は信仰の目的や欲求に基づき両者を使い分けているという。

さらに近年のドラマ等がクリスマスやキリスト教式の結婚式を取りあげることにより、若者が教会に対し抱くイメージが変化したという。著者はこの点に着目し、2種類の場で行われる宗教的活動の実践と両者の交わりを明らかにし、中国のキリスト教を総体的に捉えることを試みている。

このように「公認宗教」であるキリスト教が、信者の増加や都市化といった近代化によって生じた様々な変化を捉え、都市における宗教の実態を指摘した点に本論の特徴がある。

第I部3本目の澤井論文は、国家主導の宗教復興政策が抱える問題点を、イスラームを信仰する回族に焦点を当て分析している。イスラーム政策の歴史の変遷を整理し、さらにフィールドワークで得られた資料から、イスラーム政策が回族の清真寺(モスク)に与えたインパクトと人々への影響が記されている。

建国当初、中国共産党が打ち出していた民族政策は、民族の宗教信仰を保護する趣旨のものであった。ことのほかイスラーム政策の施行には慎重であり、回族の伝統的な慣習に注意を払って

いたようである。しかしながら1958年以降の「宗教制度民主改革」でその状況は一変し、清真寺の合併や工場への転用がすすめられ、さらに回族の共産党幹部への糾弾と迫害が行われたという。このような少数民族に対する政治運動は、同化政策を打ち出していた文革時代勢いを増す。宗教問題は階級問題だと捉えられ、宗教的活動が階級闘争の発端と考えられたため、一般民衆のみならず宗教指導者といった伝統的なエリートまでもが批判の対象となった。

著者はこの様な通時的な流れを踏まえ、現在回族の人々がどの様に宗教政策を受け止めているかという、「実践」に着目し記述をすすめる。意外にも回族の人々（清真寺関係者）は1980年第以降の宗教政策（マルクス・レーニン主義を原則としながらも宗教信仰の自由を認める方針）に対しては肯定的に捉え、その後の宗教政策の強化等も締め付けとは捉えていないケースが多いという。

この様に本論文はイスラーム政策の通時的分析およびその整理に主眼が置かれているが、興味深い点は「おわりに」に描かれている。中国の公認宗教であるイスラームが、アメリカの同時多発テロ等、1990年以降度々世界情勢のなかで注目を浴びている。地理的にアフガニスタン等と近い中国にとって、イスラームは注視すべき宗教である一方で、公認宗教であるがゆえにその存在を認めなければいけない存在である。政府は、大々的に規制を敷くことが出来ない点を、状況に応じて公然と介入できる仕組みを整備することにより、制御しようと試みているとも考えられる。これは視点を変えるなら、政府が、「中国が歩んできた社会主義的近代化」を維持するためにとった実践的対応として読むことも可能であろう。

本論文の事例は、1949年以降様々な形で見え隠れしながら続いてきた国家政策と信者のポリティクスの上で位置づけることが可能であり、さらに中国の社会主義的近代化が通時的にこのポリティクスによって維持されてきたことを示しているのである。

第I部4本目の田村論文、「現代中国における墓碑の普及と「孝子」たち——陝西省中部農村の事例から」は、中国が社会主義を経験するなかで、基本的な人間関係も変化しているとの立場から、物質文化として墓碑の建立とそこに記されている文字による記載を取りあげ、中国の社会主義近代化の一側面を明らかにしている。

著者によると、墳墓と墓碑を建立する文化は以前より存在していたものの、社会主義時代以前は一部の富裕層のみが行うものであった。一方で1980年代になると、富裕層以外の立碑行為が目立つようになる。その背景には改革開放以降、経済的に余裕のできた人々が増加したことに加え、資本や運搬ネットワークが整った墓碑業者が現れるといった、社会経済的条件が整ったことがあった。さらに著者は、墓碑建立は単なる社会経済的条件の整備によって興ったものとして捉えるだけでは不十分だとし、墓碑を立てる行為に着目し、立碑の動機や立碑のメカニズム、さらに立碑によって表現されるモノが中国の社会変容とどの様にかかわっているのかを検討する。新しく興った墓碑には、かつてであれば墓碑に記されない女性が記入されるなど、社会主義以前の墓碑建立とは異なる点が多々見いだせる。この様な差異は、例えば、墓碑建立にたずさわる当事者が、旧社会の風習を参照しつつも社会主義化の中での女性の地位向上を含めて墓碑を作りあげ

たように、既存の価値とその変化の表現形態を表していると捉える事が出来るものである。

本論文の特徴の一つは、従来考察対象として看過されてきた、「1970年代以降に建立された墓碑」に注目した着眼点である。古い墓碑が歴史的資料として用いられることはあれど、1970年代以降という比較的新しい墓碑を資料に用いる手段は斬新であり、さらに40年前という人々の記憶を辿ることが可能な年代を対象としていることで、物質文化と参与観察資料の質的融合に成功している。墓碑への女性名記載の傾向など、墓碑の実態が変化している点を、社会主義化の中で人々に備わった新しい価値観とそれまでの伝統的形態とのポリティクスとして読み解くことが可能になった点はその象徴といえるだろう。

第Ⅱ部1本目の高山論文は、かつてプロパガンダの為に生産されたものが美術品として再評価され、みやげ物へと変遷する過程を、トランプの図柄を例として明らかにし、社会主義の商品化を考察している。

世界各地で見られたプロパガンダ・ポスターは、新中国成立後の中国においても、ソ連の社会主義リアリズムの影響を受けた油絵を基にして多々描かれてきた。イデオロギー闘争の激しかった文化大革命期には、毛沢東の姿はもちろん、毛沢東の言葉を付随させたポスターが大量に刷られた。

文化大革命終了後、これらのポスターは非独創的等の批判を受ける一方で、現在では高値で取引され土産物のモチーフにもなるなど再評価を受けている。その再評価の背景には、「革命聖地」巡りを目的とした革命観光が流行ったことがあった。

著者が取りあげている土産物のトランプには、プロパガンダ・ポスターが二つの方法によりアレンジされ使用されている。一つは文化大革命時代のスローガンを削除し用いる方法であり、もう一つは文字を新しく印刷する方法である。いずれもプロパガンダという本来の文脈から切り離されている。

著者は数々の土産物の中でトランプにプロパガンダ・ポスターが用いられた理由として、トランプの実用性と人々にとっての身近さを挙げている。さらにトランプには当時のスローガン等は削除されているものの、毛沢東が国家の象徴であるというメッセージを人々に刷り込む効果があると指摘している。

本論文が指摘している、かつてのプロパガンダ・アートを新たなプロパガンダ効果を発揮させる装置として利用する可能性は大変興味深い。さらに本論は様々な発展的要素を含んでいる。みやげ物は国内外の人々が集まる特殊な場にて消費されることを想定し作られているため、みやげ物を取り巻く人々も重層的に想定しうる。彼らに目を向けること、すなわちみやげ物生産者の制作意図や販売者に対する販売実態調査、またみやげ物購入者の購入意図等、みやげ物にかかわる様々な立場の人々を分析対象としてを加えることにより、社会主義を消費する実態がより明確にできることだろう。

第Ⅱ部2本目の河合論文「都市景観の再生計画と住民の選択的参与——広州市の下町の事例から」では、広州市西関地域における都市景観再生の動きをとりあげている。1990年代以降、中

国ではそれまでの急速な画一的都市開発に対する反省から、各地の歴史的・民族的な特色を生かす都市景観の再生を行うようになった。このような再生にあたっては、地域住民の積極的な参与も行われており、本章では広東省広州市の下町における歴史的景観の再生の計画や地域住民の参加意図を考察している。

西関地域には、いくつかの西関文化のシンボルがあるが、本論文は二つのシンボルに注目している。ひとつは清末から民国期にかけて富裕層が居住した伝統民居である西関屋敷であり、もう一つは麻石道である。

著者はまず、この二つのモノがシンボル化される構造に目を向ける。両者は学術的な場において、「科学的」に中国文化と西洋文化の結合物として認証され文化的意味を賦与され、シンボル化される。さらに博物館の展示やマス・メディアの報道を通し視覚的に掲示されることにより、文化的特色を持つ景観と成る。

一方で、このシンボル化された西関屋敷と麻石道に対する人々の受け止め方は異なっていた。生え抜きの住民が西関屋敷の景観をニセモノと評し麻石道の景観を選択するのに対し、外地人やブローカーは西関屋敷を選択する。人々の持つ景観のイメージとの差が、その選択に寄与している、すなわち政策的に再生された景観の受容度合いに地域住民の記憶や価値観が関与していると言いうる。

本論文の特徴的点は、都市景観政策を例に、政策が社会主義の原理で一元的に実施されている訳ではないことを、住民側の選択的参与とその選択に起因する背景を明らかにすることにより論証した点である。これまでも他政策に関し、住民の受容や政策実施を取りあげた事例は報告されているが、社会主義を掲げる中国の近代化の進め方を明晰に論証した論文は皆無であろう。本論は、農業政策等他の政策に対する住民の選択的参与に関しても、その程度こそ異なれど同様に分析しうる可能性を秘めており、社会主義的近代化の構図そのものを示したものと評価できる。

第Ⅱ部3本目シンジルト論文は、内モンゴルのアマチュア文芸団体オランムチルを取りあげている。オランムチルの活動や人々のオランムチルに対する解釈の通時的変容から、内モンゴルが少数民族区域自治の模範として他の少数民族地域に与えた影響（著者はこれを「内モンゴル・インパクト」と呼ぶ）の意味を考察している。

オランムチルの内実は社会変化と共に大きく変容してきた。もともとオランムチルはモンゴル族の集落に赴き娯楽を提供する目的でつくられた文芸団体であった。それが文化大革命時代には、共産党と民族団結を賛美し社会主義建設と革命精神を紹介する媒体として活躍する。そしてその活動が評価されると一躍全国的なオランムチル学習ブームが引き起こされ、内モンゴル自治区外にオランムチルが広まっていった。内モンゴル自治区外に居住するモンゴル族は、オランムチルによって導入された踊りや楽器を、「中国のモンゴル族の基準である内モンゴルから来たもの」として受入れ、内モンゴルらしさを学ぶのである。

この様に社会主義普及の装置として機能していたオランムチルの活動を支えていたものは、計画経済であった。すなわち財源は地方自治体から賄われたために、興行収入等考慮することな

く活動を行うことが可能であった。

しかし市場経済時代になると、オランムチルを取り巻く様子も変化する。地方自治体からの資金はのぞめなくなり、企業や水利部などの特定機関から資金援助を受け、企業の看板を掲げた公演を行うことで存続を試みるオランムチルが増加する。またメンバーの終身雇用制が契約更新制となるなどと、状況は必ずしも芳しいものではない。

著者はオランムチルの内容の変化よりもむしろ、このような困難な状況においても「オランムチル」が存続していく理由に目を向ける。そこにはオランムチルが消費者に与える「内モンゴルのイメージ」があり、企業も営業活動にそれを利用しているとする。すなわちオランムチルはいわば「器」として存在、存続してきており、人々が欲するモンゴルイメージを時代に併せ可変的に変容させて提供してきたとしている。

筆者も内モンゴル自治区内で調査を行っており、折に触れて内モンゴルの文化的差異に関し見聞きすることがある。その内容は大抵「内モンゴル自治区の東の方のモンゴル族と西の方のモンゴル族は文化的に違う」といった、内モンゴル自治区内部の文化的差異に関する語りがほとんどであり、そこに内モンゴル自治区外のモンゴル族が語られることは少ない。内モンゴル自治区内外のモンゴル族の中での「モンゴル族イメージ」は新しい視点であり、今後様々な分析に有用可能な概念である。

第Ⅲ部1本目の小嶋論文は、ウイグル族の「漢化」を取りあげている。日常的なやり取りにおける「漢化」に着目し、「漢化」という言葉が内包する対象（自己も含む）への批判や排除そして異化といった諸要素を明示化することにより、複合的アイデンティティの諸相を描くことを試みている。

ウイグル族が語る「漢化」として、本論では、ウイグル語を読めない自己に対する自嘲といった民族言語の運用能力に関する場面や、近代的な生活様式、そしてムスリムとしての義務、漢族との通婚等諸場面が挙げられている。それらの事例からは、その相対的存在として「漢文化」を認識することが困難であることが多いという。すなわち、文字どおりの「漢文化との関係性を見出しうるウイグル族の状態」を表すために用いられているよりもむしろ、ウイグル族自身が自らのエスニックカテゴリーの中にいる他者の差別化や、近代化を「漢化」と結び付けるコード化として「漢化」という言葉が使用されている実態を筆者は指摘している。さらにそれらの語りの前提に「正しいウイグル族」という規範を見出すことが出来るという。

本論は、漢化を巡る様々な言説からウイグル族が直面している生きざまにまで細かく目を向け、ウイグル族がもつアイデンティティの細かな文節を明示した点が特徴といえる。

第Ⅲ部2本目大川論文「欺瞞と外部性——チベット現代作家トウンドゥプジャの精読から」は、チベット語チベット現代文学の創始者のひとりと目されているトウンドゥプジャの創作活動を取りあげ、チベット内部からの宗教・社会批判の可能性とその困難を考察している。

筆者は、国内外の中国文学研究者の中で、漢語で書かれたチベット文学を「現代チベット文学」と呼ぶ傾向に疑問を呈し、今日隆盛を迎えているチベット語チベット現代文学に目を向けている。

チベット語チベット現代文学は、文化大革命終了後、本格的な幕開けを迎える。トゥンドゥブジャもまさにこの時期に創作活動に励んだ作家であった。トゥンドゥブジャの作品には、チベット人にとっての近代とその受け止め方が描かれており、彼の作品を通じてチベット人の目を通した近代化を明らかにするのが本論文の目的となっている。

トゥンドゥブジャは中央民族学院などでチベット学を講じた知識人として知られている。彼は作品の中で、チベットの宗教への批判と読みうる記述を行う。彼の作品にみられる「チベット語を操りチベットの伝統学問に通じた知識人がチベットの批判者となる」構図が、一般のチベット人にとってすんなりと認知出来るものではないため、彼はある側面で「親中国派」としてみなされてしまう。しかし一方でチベットの栄光の歴史を「吐蕃伝」として残すとといった、強烈な民族主義者として評価される側面も見られる。

著者はこうしたトゥンドゥブジャの作品を踏まえ、「親チベットか親中国か」といった単純な二項対立で評価する受け手の思想枠組みの問題を指摘し、トゥンドゥブジャの意図が二項対立を超えたところにあると主張する。「チベットを愛するゆえに、チベットの発展のために批判を行う」という複眼的思考を持った考え方こそが、トゥンドゥブジャの主張するところであった。

著者は本論の中で「二元論で語りつくせないところに今日のチベットの現実を見出すべき」と主張しているが、残念ながらトゥンドゥブジャを二元論的語りで評価してしまうチベット人の現状は、むしろ「二元論で語りつくしてしまう所が今日のチベットの現実である」といいざるをえない。この二元論的状况は、現在の内モンゴル自治区等他の少数民族地域においても共通してみられる状況である。その様な状況の中にも、二項対立を超えた少数民族が生まれてきたことを本書は教えてくれる。例えば本論文のトゥンドゥブジャや小島論文中のハイブリッドなウイグル族などである。本書の中で度々見られる二元論的に語ることをできない人々こそ、中国の少数民族政策の中で自らの文化を客観的に捉えつつ前進することを試みた、中国の社会主義的近代化の産物であるだろう。そして本論文は、このような新しい人々の持つ思考のレトリックを文学作品の中から明らかにすることを試みたことが特筆すべき点と言える。

第Ⅲ部3本目長沼論文は、「現代中国における宗族新興の可能性——広東珠江デルタの水上居民を例に」と題し、広東珠江デルタにおいてかつて水上居民で会った人々が新たに宗族活動を勃興する事例を扱う。

水上居民は中国の民族識別工作にて漢族カテゴリーに属すると認定されたが、陸上に住む漢族からは非漢人とみなされるエスニック的属性を持った人々であった。彼らは1950年代からの土地改革にて土地分与を受け、陸上に定住化し、陸上居民と変わらぬ生活となっていく。こうしたなかで、彼らはもともと持っていなかった習慣、すなわち一族の系譜を書き綴る、「宗族化」行為を始める。彼らは移住元の土地柄をたよりに他の宗族の末端に自らを位置付けようと試みるのである。

そもそも改革開放以前のイデオロギー闘争に明け暮れていた時代、中国共産党は宗族行為を迷信として否定していた。しかしながら現代中国においては、共産党の側も宗族によって行われる

祖先祭祀を漢族の「伝統文化」として再評価し「民族」統合の仕掛けとして利用する意向が見られる。

長沼は、水上居民が行っている「宗族化」は、民国期以前に地域社会を支配していた宗族とは性格を異にするものと見ている。現在水上居民が行っている宗族は非漢人とみなされていた彼らを「漢人として自己体现」することを目的として行われており、宗族社会に位置づけられていた彼らを「漢族」として拾い上げる役目を担っているとしている。

本論文は、従来日本をはじめ様々な研究者が行ってきた研究をふまえた上で、漢族化の装置として宗族が機能しているという新たな知見を提供した点で高く評価されるものであろう。

3. 本書の学術的意義

この様に本書では、「社会主義」イデオロギーを掲げる国家下での近代化が如何様に進められているのかを、多角的に示している。各論文に対する評は先に示したので、本節では共著としての「本書」に対する評を述べたい。

まず、地域的に多様な事例分析を共著としてまとめた点において、他書の追従を許さぬ特徴も持っているといえる。これまでも、中国社会に関しては様々な角度から共著本が出版されており、南部、北部地域に特化しその特徴を明示分析した本は枚挙にいとまがない。もちろん冒頭で述べたように中国は多様な文化的要素を持つ国家であり、その要素はある程度の地域的広がりを持つ。そのため地域に特化する手法は地域的文化的特徴を分析する上で非常に効果的であった。その一方で、多様な文化、社会を包含しつつも一つの実態ある国家として機能している状況を考慮すると、多様な文化的社会的差異を超えて共通する要素を分析することが、現在の中国を知る上で必要不可欠であると言えよう。本書は、チベット、内モンゴル、新疆ウイグル自治区という、巨大な少数民族地域を網羅し、さらに宗族に代表される南部地域、そして北部の漢族居住地域、そして上海という経済発展著しい地域等中国の縮図とも言うべき地域をあつかっている。さらに各地域の近代化を示すと同時に、全ての事例に置ける共通項、すなわち「人びとが政策を一義的に押し付けられ、一方的に受容しているのではなく、選択的に受容したり、能動的に読み変えたりしている」実態を見出した点は高く評価出来よう。

さらに分析内容も素晴らしい。たとえばチベット、ウイグルでは、二元論に陥りやすい民族問題を、実際に生きる（生きた）人に目を向けることで、より復元的価値観で生きる人々の存在と彼らがつ可能性を示唆し、少数民族地域に対する新たな分析視点及び知見を掲示することに成功している。また先行研究の層が厚い宗族研究を取りあげた論文においても、既存研究を踏まえたうえで集積的データを用い新たな知見を提供している。さらにプロパガンダ・ポスターの土産物化やオランムチルなど、新たなトピックに中国の社会主義的近代化を見出す手法も含んでおり、各々が地域的特性を示すトピックを扱うだけでなく、学術的に意義深い研究を示していることも本書の特徴といえよう。

彼らの誕生年は、1970年半ばから後半が多い。この時期は奇しくも改革開放時期、すなわち中国が現在の政治的枠組みである「社会主義のイデオロギーのもと市場主義的経済発展を行う」方向へと転換した時期と重なる。すなわち彼らは中国が社会主義的イデオロギー闘争を活発に行っていた時代をリアルに知る世代ではない。そのため「社会主義国家」に対する「リアルなイメージ」無しに現地に入ることが可能であったのかもしれない。本書は既存の研究枠組みを超えて共著を作成した意欲的な作品集であり、随所に新観点を見出すことのできる学術的にも素晴らしい本といえよう。

経済発展を主眼に置く現在の中国社会を知るためには、経済的利益を生むモノと、国家安定のために政府が取り締まるべきモノが重複するところに政府や人々の思惑、駆け引きが存在する。そこには中国社会の実像を示す要素が多々存在する。本書は全体を通じその実像を示す要素を多々示しており、現在の中国という国家を知る上での必読書といえる。今後執筆者若手研究者が共同研究を通じ、新たな知見を我々に提供してくれるよう期待をし、本書評を終えたい。